
センター開始！

日高鳴海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

センター開始！

【Nコード】

N6523Z

【作者名】

日高鳴海

【あらすじ】

某県桂瀬市私立桂瀬高校に通う短めの焦げ茶色のツンツンとした髪型の一年生、成田洋 なりたよう は一人の女子生徒に恋をした。その女子生徒は黒髪のポニーテールの武道少女、久遠寺望美 くおんじのぞみ に告白するが玉砕してしまう。しかし、諦めの悪い洋は望美の父が趣味同然で行っている久遠寺道場に入門した。この瞬間から、洋達の波乱な日々が始まった。

プロローグ(前書き)

えっと、新しく始めました。よろしかったら感想など下さい

プロローグ

「好きです！ 付き合ってください！」

某県桂瀬市の私立桂瀬高校の体育館裏にて一人の男子生徒が女子生徒に告白を行っていた。彼の名前は成田洋 なりたよう ツンツンとした短めの焦げ茶色な髪に絵に描いたような中肉中背の男子生徒。

「……」

一方、男子生徒に告白されたというのに顔色どころか眉すらピクリともしない、凜とした目、黒くケアが行き届いた長い髪をポニーテールに結っている女子生徒、久遠寺望美は成田洋の目を見る。

洋は顔を少しだけ赤らめ告白の答えを待っていると、

「すまない、お前とは付き合えない」

それは洋が玉砕した、その現実を突き付ける答えだった。

ガン！ と砕け散りそうなガラスのハートを死守しながら洋は望美に縋るような思いで、

「ど、どうしてですか……？ その、理由を……」

正直立っているのもやっと洋はそんな足に鞭を打ち、何とか立たせていたりする。

望美はフツと、少しだけ息を吐き出し、洋の顔を真っ直ぐに捉える。

「だってお前は弱いだろ」

「え……?」

「見た感じ、筋肉もあまり鍛えられていない。オーラも感じないし、パートナーになるのだから私と対等な立場に立ってくれないと困る」

「対等な立場……?」

「そつだ。私位か、それ以上強くなってもらわないと付き合う事は出来ない」

洋は彼女の話をも黙って聞く。つまり彼女は強い男が好きだと言っている。

望美の理想の男性像は洋の現在の姿では到底たどり着けない高嶺の理想像である。

望美はそう言つて、体育館裏を離れていく。その後ろ姿を洋は愕然とした気持ちで見る。

あの背中は今のは到底手に取る事は不可能。

だつたらどうする?

諦めるのか?

(……いや、諦める訳ないだろう!)

成田洋という人間は諦めの悪い人間なのだ。一度転んだくらいじゃ洋は諦めない。

「強い男……か。確か久遠寺さんって剣道やっているって噂を聞いたことがあるな」

『剣道』という単語は洋にとって馴染み深いものだったりする。

洋はツンツンとした髪をボリボリと掻き、

「…………行くか」

そう呟き、体育館裏を後にする。

プロローグ（後書き）

うーん……こんな感じで続いていくと思います。

第一話・入門試験

「……………」

久遠寺望美は久遠寺道場の一人娘だ。

久遠寺道場には門下生という者は存在しない。理由は父である久遠寺宗一の目利きにあり、人間の本质を見抜く力があり、自分が認められた人間しか門下生にしないスタンスを取っている為である。

望美は胴着を着て久遠寺道場の真ん中に正座していて、左には真剣が刀室に入っている状態で置かれている。

そして望美の周りに藁で作られた藁蓋 わろうだ が後ろと前、四角形になるように四本並べられている。

フウ、と。

少しだけ空気を鼻で吸い、

「ハッ！」

ギン！！ と、目に力を入れ、左に置かれていた刀を抜刀。

抜かれた刀は前にある藁蓋へと向かい、無駄の無い太刀筋でバサッ！ と上側が広がる。

次に望美は構え直し、後ろにあるもう二本の藁蓋へ狙いを定める。これもタコウインナーのように上側が広がった。

この間約十秒も満たない。全く無駄を感じさせない太刀筋。

「ふう……………」

ひとまず一息いれる。

集中力というのは、集中力が高ければ高いほど精神的に疲労するもので、それが途切れればドツとして身体を襲う。

「なかなか腕を上げたね望美」

「！……お父さん、居たんですか」

端から聞いたなら失礼な言葉かもしれないが、それは宗一が気を消して道場の中へ入って来たからで本当に気づかなかつたのだ。朗らかな笑みを浮かべてながら望美の成長を喜ぶ宗一。

しかし望美は、

「いえ、私はまだまだです。証拠に……」

望美は四つある藁蓋の内、左後ろの藁蓋を持ち上げた。その藁蓋は綺麗に広がっていなく、それに切れ目が少しだけ浅いようにも見える。

しかし、よく見なければ気づかない程度であり特別気にするほどではないのだが……。

「ふむ……成る程」

望美の見せた証拠に宗一は納得の色を浮かべる。達人級の間人ならば、望美のようなミスはやらないだろう。

だから修行する。

だから努力する。

だから

武術は面白い。

「まあ、簡単に出来たら苦労はしないからね。僕だって簡単に出来た訳じゃないし」

宗一は達人級の剣術を身につけている。しかし、その域まで行くまで血を吐くような凄まじい努力をし続けた努力の賜物であり、そう簡単にたどり着けない域にいる。

「お前の太刀筋は間違いなく伸びる。これからも精進しなさい」
「はい！ 精進します」

お世辞でもなく、本音を述べた。
望美の返事に満足げに頷き、宗一は道場の襖を開け出て行く。

「……よし」

気持ちを落ち着かせると、望美は再び修行へと戻った。

成田洋は体力が尽きかけていた。
ハアハア、と膝に手を置き、顔を下にして息を整えていた。
久遠寺家は少し大きめの平屋に、外から丸裸になっている渡り廊下を歩くと平屋より少しだけ小さい道場のような建物がある。その建物は縁側があり、そこから中に入れそうな気がする。

「ふう……しかし、ここは凄い場所だな」

四〇段近い階段を含め、ここは凄い場所のような気がした。階段を歩いている時に周りには自然が広がっている。

上に登ったら登ったで、そこにも自然が広がっていて、後ろにはちよつとした山があり、一本のどっかい樹も見えた。

「何というか……夏休みに預けられた田舎の親戚の家みたいだな……」

自分でも何を言っているか訳が分からないが、何故かそんな感想が生まれた。

「さて、久遠寺望美さんは……」

「ウチの娘に何か用かい？」

ビクツと、洋は身体を震わせた。

後ろを振り向くと、そこには黒く長い髪を一本にしている髪型の、優男風の男が朗らかな笑みを浮かべていた。

洋はその場に動けなくなる。

目の前にいる優男は笑っている筈なのに。怖いようなタイプではないような気がする筈なのに。

どうして、動けないのだろうか？

眉間にわずかにしわを寄せていると、宗一は相変わらずの微笑みを浮かべながら、

「君は……ウチの娘と同じ学校に通っているみたいだけれど」

「あ、望美さんのお父さんでしたか……俺は成田洋です！ 実は今日、お宅の娘さんに告白をさせていたただいた者です！」

言い終えたあと、洋は何言っただ俺はーっ！？ と頭を抱えた。自分の失言を悔やんでいると、宗一は先ほどと全く変わらない声色で、

「それで結果は？」

「……粉碎しました」

アハハハ……、と泣き笑いをする洋。もはやどうにでもなれ！ というのが今の洋の心情でもある。

そんな様子の洋を見ていた宗一は長い黒髪をバツが悪そうに軽く掻く。

完全にテンションががた落ちしていた洋だったが、ぐわっ！ と、自分よりー〇？ 以上大きいであろう目の前にいる優男風の男を見上げた。

ん？ と宗一は首を傾げたが、次の洋の言葉によって目の色が変わる。

「俺を、久遠寺道場に入門させてください！」

「……………」

久遠寺宗一という人間は自他共に認める人の本質を見抜く天才である。

そんな天才の目が変わる。その目は物の値段を絶対に外さない鑑定士のような本質を見抜こうとする鋭い目。

(……………っ！)

洋は宗一の目を見て背筋に嫌な汗が出る。
鋭い目が洋の目を捉える。

怖い。

目をそらしたいという気持ちを押し殺す。
ここでそらしたら、永遠に望美の隣には居られない、そんな気がしたからだ。

緊張した空気が、この春の和やかな空気を支配する。その間、洋は絶対に目を逸らすことは無い。強くなって望美と付き合いたいという不純な動機であったとしても。洋は諦めたくない。
それほど、彼女の魅力に魅了されたのだから。

(……成る程ね)

宗一は胸の中で納得したかのような事を呟く。
見抜いた。
洋の本質を。

(……あ、ありゃ？ 望美さんのお父さんの目が変わった？)

「えっと、成田洋くんだったっけ？」

「あ、はい。そうですね」

「洋くん、あの樹が見えるかい？」

「え？ あ、見えます。あの大きな樹ですよね」

うん、と先ほどまでの鋭い目など一切匂わせない優しい目を洋に向けながら、山の上に目立つように生えている樹を指差しながら、

「あの樹の下にさ、僕が愛用している刀を忘れてきちゃったんだよね。悪いんだけどさ、変わりに取ってきてくれないかな？」

は？ と洋はポカンとした表情になる。

正直言うとかつたるい。

どうして久遠寺道場に入門しようと四〇段近くある石の階段を歩いてきたのに、何で自分が忘れた物を取りに行かなくてはならないのか疑問だ。

「……まあ、わかりました。どこから行けばいいんです？」

釈然としないまま、洋は宗一の頼みを承諾した。宗一は朗らかな笑みを浮かべながら、

「道場の脇に道があるだろう？ その道をなぞって歩いていけば上の樹にたどり着くよ」

「分かりました。行ってきます」

心底面倒と思いながら道場の脇にある自然に出来たような道歩いていく。

焦げ茶色のツンツン頭が森の緑で見えなくなるまでその様子を眺め、宗一は小さく、フツと息を口から吐き出した。

「お父さん、何をしているんです？」

焦げ茶色のツンツン頭の少年と入れ替わるように来たのは宗一の娘の久遠寺望美。

望美はタオルを首筋を覆うように被せ、健康的な汗を流していた。

「いや、何だか面白そうな少年が来たもので」

「……珍しいですね。お父さんが一目でそこまで人を評価するなんて」

「あの少年からは面白い何かと可能性を感じた。それに僕から目を逸らさなかつたしね。度胸もある」

「……どんな人なんでしょうか。私も見てみたいです」

「うーん、夕方から夜にかけて家にくるかもしれないよ」

かもしれない。つまり、来ない可能性も無きにしもあらず、ということを表していた。

望美は怪訝な表情になるが、宗一はまるでそれが見えていないかのようにスルーし、焦げ茶色のツンツン頭の少年が今向かっている大きな樹へと続く森を指差し、娘に問う。

「あの森、お前は知っているかい？」

「当たり前です。私が小さい頃からお父さんに言われていましたから」

望美は一息いれ、

「あの森は道が入り組んでいて、迷ってしまう可能性があるって」

「何だっつてんだこりゃああああ!!」

成田洋は自然に囲まれた森の中で叫び声を轟かせていた。

「どうして、どうして樹に近づかないんだーっ!」

そう、洋は真っ直ぐ歩いているつもりであるはずなのに全く大きな樹に近づけないでいた。

最初は良かった。

何せ真っ直ぐな一本道だったから。でも、二つの別れ道、三つの別れ道とどんどん多くなっていき、完全に袋小路と化していた。

心なしか、同じところを回っているような気がするのには本当に気のせいと思いたい。

「うーん……普通に考えたら真っ直ぐ歩けば着くはずなんだけどな……」

道がない場所も歩いている筈なのに辿り着かない。時間だけが刻々と過ぎていき、得たものといえば何の種類か分からない虫に刺された虫さされ位。体力も消耗していき、洋は遂にその場あつた木に寄り掛かるように座り込んだ。

ここからだと下へ歩き、ちゃっちゃと帰れたり出来そうだ。

森の樹木の隙間から大きめの平屋と道場が見える。それを見ながら帰れば楽に帰れるはずだ。

(そうだよ。帰れるんだよ)

徐々に徐々に、そんな後ろ向きな考えが洋の頭の中を蝕み始める。

そもそも、あの優男風の男の言うことなんざ聞く理由なんてこれっぽっちも無い。

自分が惚れている女の子のお父さんとはいえ、何で自分が忘れた物を取りに行かなくてはならない？

そう考えていくと、段々馬鹿らしくなってきた。

……………だけれど、

(約束は、守らなきゃなあ)

言った。自分が取ってくると。約束した限り、すっぽかして帰るわけにはいかない。

ガシガシガシ、と焦げ茶色の髪を掻く。

そして洋はゆっくりと立ち上がる。

目線の先には、あの大きな樹。

久遠寺望美はキッチンにてカレーを作っていた。

キッチンにある窓を通じて望美は外を見る。

外の空は夕方と夜を足して二で割ったような空になっていて、夕食が欲しくなる時間帯だ。

(……………)

お玉で鍋をかき混ぜながら、練習終了後に父である久遠寺宗一の言葉を気にしていた。

(……誰、なのだろうか？ お父さんの言っていた人は……)

父があれだけ人に興味を寄せているのだから、よっぽどの玄人くろうと か武士 もののふ か。

(……)

チラリと後ろを向き今の向こうにある縁側に座る宗一を見る。

宗一は胡座で腕を組んで座っていて、何だかよく見ると山を見ているようだ。

(まさか、いや……やりかねないかもしれない)

何故庭で父は道が入り組んだ山の説明を求めたか。

望美は一つの考えが浮かぶ。宗一は久遠寺道場にやってきた少年を何かしらの理由を付けてあの山に登らせたのではないかと。

あの山は望美が小さい頃、父親の言い付けを破りあの山に登った事がある。その時の望美はもちろんというか、やっぱり迷ってしまい、宗一に迷惑をかけてしまったという経験があった。あの時の父の背中の中の暖かみや優しく叱ってくれた事が今でも覚えている。それ以来、望美は無闇にあの山に近づく事はなくなつた。

望美はお手製のカレーをご飯が盛られた皿にカレーを流し込むように盛る。

二つの皿を持った望美は居間へ歩き、テーブルに置いた。

久遠寺家は基本的に和風であるため、地べたに直に座って食事をしている。

日本酒が入った徳利と御猪口を置いた後、縁側にいた宗一は居間の

方に身体を向けた。
朗らかな笑みは相変わらず。

「随分と食欲がそそられる匂いがすると思ったら今日はカレーだったんだね」

「はい、カレールーが安かったんで。では、食べましょうか」
「そうだね」

宗一は立ち上がり、居間のテーブルの手前に座り、望美を座り、

「「頂きます」」

二人はカレーを食べ始める。

カチャカチャと食器と食器が軽くぶつかり合う音がキッチンに響く。食後、宗一は徳利に入った日本酒を御猪口に移し、縁側で飲んでいく。

やっぱり宗一は山の方を見ていた。

(……やっぱり)

望美の予想は確信に変わる。普段宗一はあれだけ山を気にする素振りを見せたことが無い。

間違いない。宗一はあの山に少年を行かせた。

どうして？ と疑問に思っている内に洗い物を済まし、水道を止めた。

冷水に濡れた手をエプロンで拭い、エプロンを外した。

勉強しようと思い自分の部屋に向かおうとした時、

バタッ！

「ん？」

玄関辺りで何かが倒れたような音が聞こえた。

玄関には物を立て掛けていた記憶はないし、望美は何だ？ と思う。

何なんだ？ と思いながら望美は玄関に向かい、引き戸をガラガラ

と開けた。

そこには、

「…………お前は」

玄関の電灯は人が近づくと勝手に光る仕組みになっていて、倒れていた人物を確認するには十分なくらいに照らされている。

そこにいたのは、望美と同じ学校の男子の制服を着用していて、木の枝や葉っぱが制服や焦げ茶色のツンツンとした頭に突き刺さっている少年。

望美はこの少年を見た途端、少しだけ驚く。

(…………どうして、ここに？)

自分がフった少年が今、玄関にてぶっ倒れている。驚くな、という方が無茶だろう。

(木の枝……葉……まさか、お父さんの言っていた少年って……)
「あ、彼来たんだね」

バツと後ろを振り向く。父の宗一がニコニコとしながら立っていた。

「随分と驚いた顔しているね。そんなに驚いたかい？」

「当たり前です！ どうして、この男が」

「話は後で。とりあえずそこに倒れている……成田洋くんを運ぼう」

宗一は望美の言葉を遮り、洋をおんぶし家の中に入っていく。

未だに戸惑いを隠せずにいる望美は少し間を空け、家の中へ入っていく。

第一話・入門試験（後書き）

感想などお待ちしています

第二話・合格

「……うん」

「あ、目が覚めたみたいだね」

洋はつなり声を上げながら目を覚ます。洋は寝ぼけているのか半目状態で久遠寺家の居間を見渡す。

意識がどんどん復活していき、洋はハツとした表情に変わる。

「あの、ちょっといいですか？」

「何だい？」

「あの樹の下には刀があるっていいましたよね？」

「うん、言ったよ」

だからなに？　と言わんばかりの表情の宗一に洋は言う。

「刀、ありませんでしたけど」

恐る恐る、洋は小さい声で言った。

洋はどうにかして山の上まで登ったのはいいものの、そこには刀なんて代物は存在しておらず、ずっと刀を探している内に暗くなっていた。

宗一は手を口につけ、クスリと笑う。洋はその様子を怪訝そうに見ている。

「ごめんね、刀を忘れたなんて嘘だったんだ」

「う、嘘お！？」

悪気が全く見えない謝罪をする宗一に洋は驚愕の声を上げた。

「え、あ、嘘って……じゃあ、あの森の中でずっと刀を探し続けたあの時の俺の苦勞は一体……」

泣き笑いに近い声を出しながら洋は森の中で虫や草木と奮闘していた時を思い出す。

「僕が刀を忘れるわけないよ。でも、娘<命<刀。だけれどね」

知らねーよ！ とツッコミたくなっただがもつどうでもいとばかりにため息をつく。

「……」

ふと、改めて洋は冷静になって周りを見渡した。ここは久遠寺家。自分は縁側で夜風に当たりながら眠っていた。居間には朗らかな笑みを浮かべている望美の父。

（久遠寺家……はっ、つまり！ ここには望美さんがいる！）

先ほどの疲れもどこへやら。すっかりテンションがマックスに近い状態になった洋は再度周りを見渡すが、あの綺麗な黒髪のポニーテールの少女を見つける事は出来なかった。

（あれ……どこにいるんだろう？）

「あ、望美」

「えっ!？」

宗一の口から素敵な名前が出てきた。その名前に反応し洋は居間を見る。そこには学校では見られない可愛らしい水色のパジャマを着て、ポニーテールを解いている久遠寺望美の姿があった。どことなく唇や頬が赤い所を見ると、多分お風呂に入ったのだろう、と洋は予想する。

(望美さんの入浴……)

ぼわわわ〜ん……と、勝手な妄想を始めたと思ったら、

(……げ、鼻血)

鼻から血が流れていた。エロい事を考えたら鼻血が出るというのは漫画やアニメだけのお約束だと思っていた洋にとって、少し驚いていたりする。

「はい、ティッシュ」

「あ、すみません」

宗一から渡された箱型ティッシュを受け取り、二枚抜き取り鼻に詰める。鼻血は意外と簡単に止まり、数秒後には既にティッシュはいらない存在と化した。

「お前はどっしってここにいる」

「えっ？」

洋が座っている縁側まで近づき、洋より少し離れた場所に座り洋に質問する。

「どっしってここにいるかと聞いているんだ。私の立場からは大きく

は言えないが、お前は私にフられたんだぞ？ だったら、近づきにくくなる物なんじゃないか……？」

「うーん……まあ、確かにフられて悲しくはなりましたが、望美さんが言う『強い男』になれば、もしかしたら可能性があるんじゃないかなー、って思ったから、ここに来たんです」

「誰から聞いた？」

「友達です」

洋の言葉に望美は頭を抱えた。望美は洋の性格を知らない。だけれど、今なら何となく分かる気がする。

「……なあ、一つ聞いていいか？」

「何です？」

「お前はあの樹までたどり着いたんだよな？」

「はい、そうですけど」

「どうやってたどり着けた？ 私が小さい頃は道を歩いても歩いてもあの樹にたどり着けなかった。小さい頃から見ている森でさえ……」

「お前は、どうやってたどり着けたんだ？」

端から聞けばどうでもいいと一蹴出来そうな問い。洋は山の樹を顔を向けながら言う。

「簡単ですよ。真っ直ぐ歩けばいいんです」

「え？」

あまりにも意外すぎる洋の答えに拍子抜けしたような声が出た。にわかには信じがたいと言わんばかりの表情の望美であったが、洋は頬を右手の人差し指で軽く搔きながら続ける。

「あの山って、確かに迷いますよね？」

「そうだろう。でも、道を真つ直ぐ行ってあの樹にたどり着けた
」
「違いますよ」

望美の言葉を遮り、洋は両手をヒラヒラと振り、

「道を真つ直ぐ行ったんじゃないくて、森を真つ直ぐ行ったんです」
「森を……？」

「はい、道の上を歩いていたらたどり着けない。だったら、違うところを歩こうという考えに至りまして……その所為で木の枝や葉っぱとかが頭にくっついたとかしましたけど」

軽い口調で、まるで当たり前の事を言うかのように話す洋。しかし、顔や手にある擦り傷などを見ていると如何に大変かどうかが分かる。洋の顔からも疲れの色が隠しきれずにいる。

「ふふ、面白いことをやるんだね洋くんは」

優しい口調で呟くように言った宗一は洋と望美の真ん中に座る。

そして、宗一は実はね、と言葉を始め、

「あの道を歩いてちゃ絶対に上にはたどり着けないんだよ」

「「えっ？」」

洋と望美の声がハモる。当たり前だろう。本当に宗一のだったらあの道の存在意義が見当たらない。

「えっ、お父さん、どいいう原理でたどり着けないようになっていくんですか？」

「簡単さ。結局あの道は最後には同じ場所に戻る仕組みになっているんだよ。だから、あれは言っちゃえば出口が無い迷路なんだ。だったらどうやって上にたどり着けばいい？ あの樹に向かって歩いていけばいいのさ。道に関係無くな。そうすればあの樹にたどり着くって訳。これはある意味発想の転換だ。マニュアル通りにしか動けない人間ではたどり着くことが出来ない山。それがあの山なのさ」
淡々と語る言葉を洋と望美は黙って聞く。

発想の転換。

洋自身がこれが出来たかと言われると首を傾げるだろう。実際には考えもせずただあの樹に突っ走っただけである。

だが、それが幸を制し今ここにいる。

望美は苦虫を噛み潰したような表情になっていて、何かを考えているようだった。

27

言いたいことを言い終わると宗一は顔を洋の方を向ける。
そして、一言。

「合格」

と。

洋は一瞬何を言っているか分からないと言わんばかりの表情になったが、どんどん明るい表情となっていく。

「こ、合格……っ、つまり……！」

「入門を許可するよ」

「……よっしやあああああああ！！」

疲れなんて吹っ飛んだとばかりに、心の底からの叫びが久遠寺家に響き渡る。

状況が全く掴めずにいる望美は宗一に聞く。

「あの、お父さん。その……洋って男を道場に通わせようとしているのですか？」

「うん、そうだけれど」

望美は目を十円玉久遠寺位の大きさまで開く。

心底驚いていた。

宗一が新たに道場に人を向かい入れるなんて望美にとって異質な感じだ。

望美は洋に恐る恐るに話しかける。

「えっと……」

「あ、よく考えると自己紹介していませんでしたね。俺は成田洋つています」

「そうか。成田、お前剣道していたことがあるのか？」

「……はい、小学生の頃に三年ほど……止めましたけど」「どうしてだ？」

「ウチの親父は小学校の教師でして、転勤してばかりだったので」「成る程……」

納得したようにうんうんと頷く望美。

一方洋の表情はどこか、悲しそうな切なそうな、そんな表情になっ

ていた。

ふう、と息を吐き、

「そういう事ですけど、道場に決めもいいですか？」

「……ああ、お父さんが決めたのなら」

「あ、ありがとうございます！ 絶対に望美さんの理想の男になってみせます！」

「……、」

洋は立ち上がり望美に近づき、望美の手を握りそう宣言した。望美はどうしていいかわからないのか、何とも言い難いような気持ちだ。

「モテモテだね。望美」

ニヤニヤと、普段の朗らかな笑みとはまた違う底意地の悪い笑みを浮かべながら茶化すように言う宗一。

茶化された望美は心底うんざりしたように息を吐く（ちなみに、この時に洋に握られた手は振り払われた）。

「茶化さないでください。別に恥ずかしがったりはしませんよ」

「完全に意識されてない……」

「あはは……同情するよ」

絶望に満ちた表情でうなだれる洋に宗一は肩にポンと置き同情する。ある意味、現在進行形で恋している人間しか分からない心の痛みだろう。

あっ、と宗一は何かを思い出したかのような声を上げる。

「もう夜遅い時間帯だけれど、大丈夫かい？」

その言葉を聞いた刹那、洋は少しだけ、本当に少しだけ眉間に皺を寄せ渋い色顔に出た。

洋は頭を掻きながら、自虐を言うような声色で話す。

「ええ、大丈夫です」

と、一言だけ、何かを言いただけな感じてあったが、それを全て押さえ込み、完結に答える。

洋は立ち上がり、

「あの、玄関はどこです？」

「ああ、玄関は居間を通って左の廊下を歩いた突き当たりにあるよ」

「そうですか、ありがとうございます」

ぺこりと、礼儀正しく頭を久遠寺親子に下げ、

「では、明日からよろしくお願いします」

挨拶をし、洋は縁側を後にし玄関へと向かう。

「ふあゝ……何だか疲れたな」

欠伸をしながら玄関で二ヶ月位に購入した一九九八円の白と黒が入り混じった安物のスニーカーを履いている。

トントントン、とつま先を玄関に突きキチンと踵まで足を入れ、玄関に置いてあった学生鞆を背負うように持つと、

「さて、帰るか」

「ちょっと待つてくれないか？」

ふと後ろから声をかけられた。この声に反応するように振り向く。久遠寺望美がそこに立っていた。既に顔や唇は人間として普通の色に戻っていて、風呂上がりの色っぽさは抜けていた。

「はい、何ですか？」

「一つだけ聞かせてくれ。成田は、私をどうして好きになったんだ？ 私はお前とは初めて会っているんだぞ？ 好意を向けられるような事を行った記憶もない。なのに、どうして……」

「一目惚れ、ですかね」

恥ずかしがる事無く、堂々と洋は言い放った。鳩が豆鉄砲を食ったような表情になる望美。

「では、明日よろしくお願いします。望美さん」

もう一度ぺこりと頭を下げた洋はガラガラガラと引き戸を開け久遠寺家から出て行った。

「……げ、そうだった……忘れてた、階段」

目の前には、四〇段近い段がある石で出来た階段。疲れている身体にはちとキツイ。

「はぁ……」

憂鬱そうなため息をついた洋は階段という強敵と戦つたのだった。

第二話・合格（後書き）

感想など待っています

第三話・稽古始め

次の日。

学校を終わり洋はあの四〇段近い石段を歩き、久遠寺道場へと向かっていた。ここを歩くだけで多分ダイエットになるんじゃないかな？ と、どうでも良いような事を考えながら歩いていく。

そして、上までたどり着き、洋は道場の方に向かい、縁側から上に上がり、道場の襖を開けた。

道場はとても広く、左には神座に掛け軸が立て掛けられていて『精神一到』と書かれている。

竹刀掛けも神座の近くに置かれている。

洋は板張りの床を歩き、竹刀掛けがある所まで行き、七本ある内の一本を引き抜き、竹刀の状態を見た。

(……こりや凄いな)

柄の色から見て、竹刀の状態はボロボロになっていてもおかしくない筈なのに、竹刀はささくれも無い綺麗な状態になっていて、手入れの良さがよくわかる。

先ほどまでは気が付かなかったが、板張りの床もとても綺麗だ。埃一つも無い。掃除も隅から隅まで行き届いている。

「久々に素振りでもしてみるか」

制服の上着を脱ぎ、竹刀の柄を上には軽い力で右手、柄の先端には左手を添える。ふう、と小さく息を吐き、竹刀を頭の上まで上げ、

添えていた右手に力を入れ振り下ろす。

懐かしい。

今の洋の気持ちを表すならこれが一番合うだろう。小学二年生から五年生まで剣道をしていた時の事を思い出す。

「腰が入っていないな」

感傷に浸っていると道場内に女の子の声が聞こえた。

開いている襖を見ると、久遠寺望美が紺色の胴着と袴を着用して立っていた。

「手だけで振っているぞ。竹刀や刀は腰を入れて振るんだ」

「そうでしたね……あ、いつ帰ってきていたんですか？」

「さっきだ。それよりも早くこれに着替える」

「胴着と袴？ これ、誰のです？」

望美から渡された物は少し年季が入った胴着と袴。

紺色が何回も洗濯をしたのか少々脱色されていて、紺色というよりは青と言った方が良さだろう。

「お父さんの昔使っていた胴着らしい。私はこれを使った所を見たことは無いけど」

「へえ、そうになると本当に昔の物なのかもしれないですね」

「多分そうだろう。私は外に居るから早く着替えるんだぞ」

望美はそう言うつと襖を閉め外へと出て行った。

胴着と袴を渡された洋は言われた通りに胴着を着始める。

「では、稽古を始めるぞ」

着替えた後、洋は望美を呼びまず準備体操をしてから防具を着ける。四年前てはいえ、着方が身体で覚えていたのかスムーズに防具を着用出来た。

望美も防具を着用し、今に至る。

「はい、お願いします」

「……よし、行くぞ！」

初っ端本気モードの望美の竹刀を洋はギリギリに倒れ込むように避ける。

準備体操でそこそこ身体が温まっているとはいえ、いきなり面を狙ってくるとは予想外だった。

「どうした、早く立て」

「いきなり過ぎて吃驚した……最初は基礎稽古からなんじゃないですか？」

「お前は剣道経験者だろう。それに実践の中で経験を重ねるというのが久遠寺流だ」

んな滅茶苦茶だーっ！ と叫びたくなかったが、そんな暇も与えないとばかりに次の攻撃が洋に向かう。向かう先は再び面。洋は竹刀で受け止め、鏝迫り合いへと持ち込んだ。

「ほう、ブランクがあるとは思えないな」

「ええ、何となく身体が覚えているんですよ」

「そうか……はっ！」

洋の竹刀を払い、体勢が少し崩れた時、チャンスと見込んだ望美は竹刀を振り上げ、洋の面へと振り下げた。

バシッ！ と痛みがよくわかる音が鳴り響く。

「いったあゝ……奥に当たりましたよ！」

涙目で訴えるも望美はそれを完全スルー！

「まだまだ、稽古はこれからだ」

「……もう、どうにでもなれ！」

痛みを我慢し、洋は摺り足で望美に向かい、面を狙うも大振り、そして腕だけが前に行っていた所為か望美に軽くあしらわれ、背中に軽い衝撃が飛んできた。

「真剣だったら切られていたぞ」

「ぐっ……うおおおおおおお！！！」

男の雄叫びが道場を侵略する。

負けん気が混じった目を望美に向け、望美に近づくが、

「甘い！」

洋の勢いを逆に利用し突きを喰らわせた。突きは剣道の技の中でも危ない部類に入る技で、突きを間違え喉に竹刀の先端が刺さるといふ事も起きている。

しかし、望美の突きは見事に突き鐔を捉えていた。カウンターパンチを喰らった洋は少しよろけたが、体勢をあまり崩さず、次の攻撃に移る。

「うおおおおお！！」

雄叫びと共に何度も何度も望美に一本取ろうと頑張るが、完全に実力が違いすぎた。面を打とうとすれば防がれ面返し胴をされ、小手を狙えば竹刀を払われ面を打たれ、胴を狙えば突きが襲い掛かる。洋の攻撃は一度も当たらない。しかも望美はあまり本気を出していないようにも見えた。

「はあ、はあ、はあ……くそお……全然駄目だ。実力が違いすぎる」
「当たり前だ。成田より長く剣道を続けているんだ。当然だろう」

悔しいがその通りだ。

おそらくこれ以上続けても洋には勝ち目はないことは目に見えている。

洋は肩で息をしているのに比べ、望美は未だに隙の無い構えを続けているあたり、体力の面に関しても洋が不利であることも一目瞭然。それを感じた望美は隙の無い構えを解き、

「終わりだ」

一言、洋に告げた。

洋はポカンと気が抜けた感覚が走る。

「ええと、何ですか？ まだまだ俺はいけますよ！」

「いや、オーバーワークは身体に毒だからな。今日は始めの稽古だし、こんなものだろう」

正座し、面紐を解き手拭いを頭から外す。外すと綺麗な黒髪が露わになり、顔には健康的な汗が流れていた。望美は胴と垂れを外し、綺麗に畳む。ふと、洋に目を向け、

「……どうした？ 稽古は終わりだぞ？ 早く防具を外したらどうだ？」

「あ、はいっ！」

あたふたしながら洋は返事する。望美は怪訝な顔になるが、まあいいか、と襦を開け道場から出て行った。

洋は望美の微妙にはだけた胴着から見えた鎖骨やら出来物が一つもない肌に釘付けになっていたりしていた。

発育が良い望美の身体に興味津々なのは仕方がないと洋は自分に言い訳しながら胴着を脱いでいく。

少々短めのツンツン頭が少しだけペタンとなっている。ガシガシガシッ！ と手拭いの所為でペタンとなった焦げ茶色の髪がある程度まで戻す。だが、あまり効果は無い。

「とりあえず着替えるか」

袴の紐をヒュルヒュルヒュル、と解き上の胴着も脱ぐ。

胴着と袴を脱ぎ、道場の端っこに置いていた制服に着替え始めた。

「ふう、何だか疲れたな……」

呟きながら昔の記憶を辿りながら胴着と袴を畳む。意外と頭では何となくではあるがよく覚えているものだ。

辿々しくはあるが、胴着と袴を畳み、防具も畳み端っこに防具を置き、竹刀も仕舞い洋は学生鞆を背負い道場を出た。

縁側に座り、疲れた身体を休ませていると、

「あ た つ」

コツンと頭に何かが軽くぶつかった。

上を見ると、望美が五〇〇ミリリットルが入っているポカリスエットを渡してきていた。

「汗掻いた後は水分補給しないと脱水症状で倒れるぞ」

「どうもっす」

望美は私服に着替えていて、可愛い女の子の服ではなく、ボーイッシュな印象を受ける服装だった。

白いシャツに黒の上着を羽織り、クラッシュジーンズを履いたスタンス。男がこのファッションをしていても違和感は無いだろう。

しかし彼女はそれを着こなしていて、可愛い女の子ではなく格好いい女の子と称した方が合っているような気がする。

「……………はあ」

「ん？ どうした、突然ため息をついて」

「さっきの稽古なんですけど、望美さんに手も足も出なかったなー、って思っています」

さっきの稽古では一本所か望美の防具にさえ全然当たらず、唯一当たったのは最初の鍔迫り合いで微かにカツカツと当たった位。

がっつききっている洋に望美は慰めるわけでもなく本当のことを言い切った。

「当たり前だ。完全に続けてきた期間が違う。負けるのは当然だろう」

「ぐっ……」

何も言い返せない洋。

だがな、と望美は言葉を紡ぐ。

「根性は素直に凄いと思うぞ」

「へ？」

まさか褒められるなんて夢にも思っていなかった洋は声が裏返った。

「正直に言うと、最初にやった面でお前は諦めるのではないかと思っ
っていたんだ」

最初の面。

望美が初っ端本気モード全開で打ってきた面の事。

今思い出しても驚く事が出来ると思う。

「だが、諦める所か私に向かってきた。何回やられようと諦める事
なんて知らないように」

「昔から諦める事が好きじゃなくて……可能性が低かろうと相手に
向かってくる事が多かったですね。……その所為でしなくとも
いい怪我をよくしてきましたが」

自虐的に呟く洋。

そんな過去があり、無駄に打たれ強い身体が出来上がったのは感謝
するべき所なのかもしれない。

口にポカリスエットを流し込む。
乾いた喉や身体にポカリスエットが潤いを与え、喉と喉がくっ付く
ような感覚が薄れていく。

「この分なら多分お前は強くなると思う。根性がある男は……私は
好きだぞ」

「!?!」

洋の身体に電流が走る。右手に握っていた五〇〇ミリリットルのペ
ットボトルが小刻みに震えていた。

(まさか……! これは……デレなのか!?)

洋の思考が斜めの方向に逸れてゆく。

(つまり、『洋くん、君は強いわ! そんな洋くんは私だあいすき
』という事になるわけだ!)

斜め所か望美の言いたい事の一刻も理解していないようである。
フフン、と鼻を鳴らし、

「そんなツンデレの望美さんも……大好きだああああ!!」

「なっ! 抱きつこうとするんじゃないバカ者が!」

ゴソツ!! と鈍い音が洋の頭から聞こえた。

抱きつこうとした洋を望美は頭に拳骨を入れていたのだ。

「まったく、どこをどうなってその……『つんでれ』となるのか理解
しがたいな」

「……その様子だとあまりツンデレを理解していませんね」

「うむ、つんでれとか萌え……とかはよく分らん。去年学園祭のあるクラスでつんでれ喫茶をやっている、そこにいたウエイトレスは何だか不機嫌そうだったが……不機嫌になることがツンデレなのか？」

「違いますね。ツンデレって言うのはツンツンデレデレの略で、初めはツンツンして取っ付きにくい感じだけど、どんどんデレてくるのがツンデレです」

「……となると、成田は私をツンデレと言っていたが……ん？ おかしくないか？ 私はいつデレデレになった？」

ジドーっと不機嫌そうに洋の顔を見る。

何だか今日は望美の色々な表情が見えるなーっとはんわかした気持ちになる洋。

「それにな、私は成田にデレデレになる予定は金輪際無いし」

「いや、絶対にぜえつたいに望美さんをデレさせて彼女にしてみせますー！」

「はいはい、期待してるぞ」

言葉とは裏腹に、望美は呆れるような口調になっていて、手をヒラヒラと振りながらどうでもいいと言わんばかりの声色でもある。

(……まあ、分かっていたけどね！ あんな展開(俺が妄想したやつ)はまだまだ先だと言うことはな……)

ガクンとうなだれる洋。

好感度で言えば、一〇〇パーセント中、二、三パーセント位しか好感度は無いだろう。

これは一方通行の恋だという事は理解出来ている。洋はそこまで頭は残念ではない。

だが、諦めたくない。

本気で、久遠寺望美という女の子を成田洋は好きなのだから。

「あ、そう言えば宗一さんに挨拶するのを忘れてた……望美さん、宗一さんは今どこに居ますかね？」

「お父さんは居ない」

「え？ あ、すみません……そんな事になっていただなんて……」

気まずい事を聞いてしまった後のように静かに言う洋に、望美は少し焦ったように、

「ち、違う！ そう言う家庭の事情があれだとかじゃない！ お父さんは放浪癖がある人だから、またに置き手紙を残してどこかに行くときがあるって事だ」

「ああ、なるほど……って放浪癖ってどこに行っているか分かっているんですか？」

「いや、『出掛けてくるねー』とだけ書かれていただけだから正確にどこに行っているかは把握していない」

意外とちゃんぼらんなんだな、と洋は心の中で寸評した。若く見える朗らかな笑みを浮かべた優しそうなお父さん、というのが洋のイメージであった為、意外に厄介な癖を持つ宗一に抱いていたイメージが少し変化していた。

それ以前に、もし昨日この道場に来なかったら、宗一とは会えずに道場の入門も出来なかったかと思うと、自分はとても幸運ボーイだという事を理解するには時間はあまり必要では無かった。

「いつ帰ってくるかも分からないし……」

「え？ ってことは暫く望美さんは一人何ですか！？」

活き活きしながら望美に聞く洋。
望美は怪訝な顔で、

「そうだが……それがどうした？」

「こんな大きな家に一人は危ないですよ！　もしよかったら

「結構だ」

「俺が泊まる　　って、結論早すぎませんか！？　断るならせめ

て少しは考えてーっ！」

ぎゃあぎゃあ！　と騒ぐ洋に望美は額に剣道を嗜んでいるとは思えない女の子らしい指を当て、かつたるそつに答える。

「お前が居た方が危険な気がするからな。それに私は馴れているから問題はゼロだ」

「で、でも……」

「それに成田だって家族が居るだろう。心配されるんじゃないか？」

さっきまでテンションが高かった洋が沈む。

暗い表情がチラリと見えたが、望美は気が付かない。

アハハッ！　と明るく笑って見せ、

「確かにそうですね。では、せめて

学生靴を開け、シャープペンシルと授業で常に使用しているルーズリーフを一枚抜き取り、縁側の板を下敷きのように使い、サラサラサラッと英語やら数字やらを書いていく。

書き終わった洋はルーブリーフを望美に差し出した。

「……………？ 何だこれは？ 何かの暗号か？」

「違いますよ。俺のメールアドレスと電話番号です。何かあったらこの番号にかけてきてください。必ず駆けつけますから」

「……………」

では、また明日よろしくお願いします、と頭を下げて洋は縁側を立ち、石段を降りていく。

第三話・稽古始め（後書き）

感想など待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6523z/>

センター開始！

2011年12月24日06時45分発行